



本当に猫が好き

穂高 忍

その日は初夏の微風によってピンクの薔薇の花が優しい香りを漂わせていました。

いつもの時刻、バイクの音が静かに止まって「カチン」と郵便箱の閉まる音が聞こえました。何時になく、少し心をときめかして郵便箱のネジを廻しのぞき込みました。何通かの郵便物の中に不定形の分厚い茶封筒が入っていました。手に取ってみますと、表にはがっちりとした楷書で宛名が大きく書かれています。裏返して見ると、T氏からでした。その差出人が意外だったことに驚きながら、何だろうと思い急いでその封筒の口を切ってみました。中からは、くすんだ紫色の色画用紙の表紙に『チビ』（日記風俳句）と題され、猫チビの絵が手書きされた手作りの小冊子と、お手紙が出てきました。

その郵便物の差出人 T 氏は、私が未だ学生だった頃に、隣接する建物に勤めていた人で、私たちが部活動をしていると、その様子を時々窓辺に腰をかけて見て居られました。お目当ては、私の 1 学年下の仔猫のように可愛い、ほっそりとした色白の A さんだったようです。卓球部のエースだった A さんの巧みなラリーとスマッシュ、そして華麗な姿は、学友の間でも憧れの的でした。

卓球が好きだった T 氏とはいっしょに親しくなって交際が続いていたようですが、A さんは卒業を前にして病気で急逝されたのです。突然の悲しい別れに、失意の T 氏はそれを機にこの建物から去っていかれたようでした。

過去の出来事などすっかり忘れた様に、年月が巡っていました。

ところが 何と奇遇な事に、35 年後に私はその T 氏と同じ職場で勤めることになったのです。

T 氏を 上司として迎えました時は、実に感無量でした。でも職場では必要以外言葉を交わすこともなく、勿論、昔の事など語ることはできなかったのです。短期間で職を去られ、もう 18 年も経っているのです。

最近先輩の方から、その T 氏がとても猫好きな事を聞かされました。猫とその T 氏が、赤い糸で結ばれているなんて、どう考えてみても思いつかない事でした。それは、T 氏の外見が、身の丈も大きく頑健でこわ面で、その上無類の酒豪で、男の中の男という感じの人だったからです。

二つに折られた便箋を開いて、又々驚きました。語ることのなかった時代のことが縷々書かれ『特に人生というものを深く考えさせてくれた時代であったと今つくづく思います。』と、その次に、『私は 10 数年チビという日本猫と蜜月を送ったのです。今は冷たい土の下ですが、家の門を出たすぐ傍で眠っています。小さな碑の前に水を供えてやるのが毎朝の務めです。』との事。ここまで読んだ私は、あの仔猫の様にしなやかで、鈴を振ったような声の可憐な A さんと、猫のチビちゃんを重ねてしまいました。

句集を開いてみますと、平成元年から 11 年までの時折々の俳句が 260 句も書かれてあります。どの句にも細やかな観察と、慈愛に満ちた豊かな表現に、T 氏は本当に猫が好きなんだと、つくづく思いました。

作者のご了解を得まして、その一部をご紹介します。

面白いのは、

水を飲む 猫にもの言う 秋の暮
くちなしが 一つ咲いたと 猫に言う
物忘れ 猫にたずねて 春うらら

おでん煮え 猫の背を撫ぜ 酒を注ぐ

もの言わぬ 猫と向き合い うどん鍋スキ

猫から応えが返ってこないことがわかっていながらも、語りかけずにはいられない心の内なるものに共感する私です。

いつかの TVCM で作家の浅田次郎氏が「原稿を唯一読んでくれたのは、ネコの『民子』であった」と言われた 台詞を思い出しました。癒されているのは本当は人間の方なんだと思うのです。

又、次の句

留守番の チビ忘れず 春の旅
箸紙に 猫の名書いて 落ち着きぬ
猫眠り そっとカーテン 閉めてやる

など、家族の一員として接しておられる深い愛を感じました。

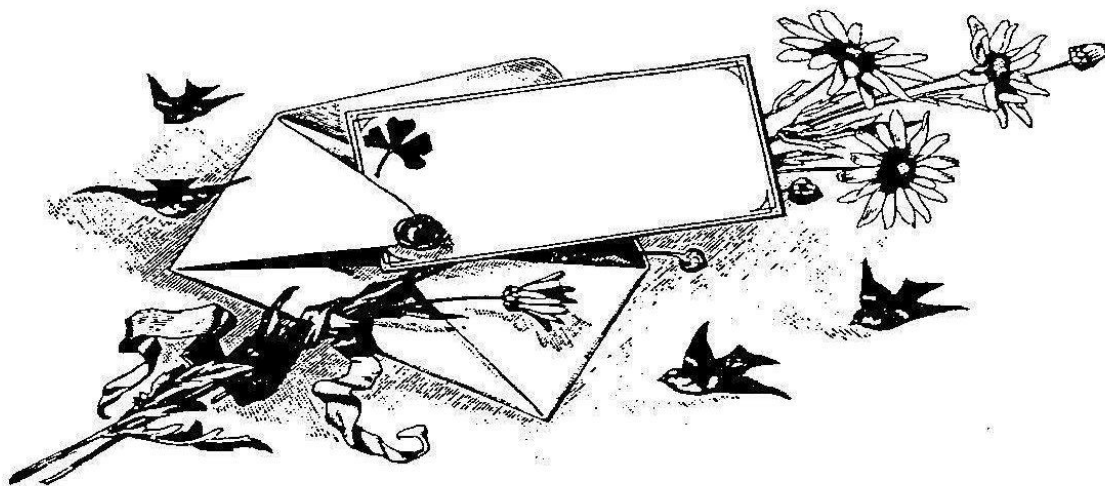
寒くなった季節に、お酒好きの T 氏が夕餉を楽しむ様が、映像で見る様で顔がほころびます。この様に時を共有したチビちゃんとも哀しい別れをされましたが、『チビちゃんがいて楽しい毎日でした。本当にありがとう』との感謝の言葉でしめくくっておられる句集を読み終えた私は、老境に入られた T 氏の温もりと静かな時の流れを感じました。

最後の句

猫の目の 優しくなりて 秋隣
墓碑銘に 書くこと多し 虫すだく

T 氏は今朝も墓碑に水を供え、昨日の出来事をチビちゃんに語り聞かせておられることでしょう。

T 氏は私と同様本当に、猫が好きなんです。



追. T氏は、2004年6月、永眠されました。
いから ご冥福をお祈り申し上げます。